

学士課程 4 年生の「倫理的実践」の学習状況-リフレクションシートの記載内容から-
光木幸子、毛利貴子、占部美恵、眞鍋えみ子、岡山寧子

京都府立医科大学 医学部 看護学科

【目的】A 大学では 4 年生後期に臨地に即した看護実践能力向上を目的とした授業を行っている。その構成は、看護技術学習(以下演習 a)、ME 機器の理論と操作、シミュレーション学習(以下演習 b)、OSCE である。今回は事例を設定した演習 a と b のリフレクションシートの「倫理的実践」の記載内容から学生がどのような学びを得ているかを明らかにする。本授業の「倫理的実践」能力は、『患者の尊厳を守ることを意識しながら日常生活援助を行う:以下能力 A』『日常生活援助を行うとき、その必要性和選択肢を説明した上で、患者の希望を尊重して実施する:以下能力 B』『患者が治療について十分に納得していないと察したとき気持ちや疑問を表出できるようにする:以下能力 C』の 3 つとした。

【方法】対象は、2011 年 11 月に授業を受け、研究の概要と匿名性の保証、参加の有無により不利益を生じないことを説明し、同意の得られた学士課程 4 年生 32 名中 30 名(93.8%)のリフレクションシートである。これは演習後グループワークを実施し、その後個人で 7 つの視点(手順、技術内容、声かけや接し方、観察内容、医療安全、感染予防、倫理的実践)でリフレクションし記載する。分析は「倫理的実践」に記載した一文を一内容とし、研究者 2 名で意味の類似したものを分類整理した。分析対象は、演習 a62 文、演習 b62 文のうち倫理的実践内容でない記載を除いた演習 a57 文、演習 b51 文とした。事例は、演習 a 高齢者肺炎患者の酸素吸入中の口腔ケアと全盲の糖尿病患者の自己血糖測定とインスリン注射、演習 b 狭心症発作時の看護である。

【結果】演習 a の能力 A の記載は 36(63.2%)でその内容は[プライバシーを保持する]23(40.4%)[個人情報保護する]7(12.3%)[人として尊重する]6(10.5%)、能力 B は 17(29.8%)で[説明し同意を得る]13(22.8%)[患者の意向を尊重する]4(7.0%)、その他[不必要な苦痛を与えない]4(7.0%)の記載があった。演習 b の能力 A は 34(66.7%)で[プライバシーを保持する]28(54.9%)[人として尊重する]6(11.8%)、能力 B は[説明し同意を得る]12(23.5%)、その他[不必要な苦痛を与えない]5(9.8%)の記載があった。能力 C の記載は倫理的問題が生じたときの能力であり両者ともなかった。

【考察】共通して多かった内容は、患者の尊厳を守る能力 A の内容であった。特徴的な内容は演習 a では“口腔内を見られることが意外と恥ずかしい”という患者体験から[プライバシーを保持する]、血糖測定値を大きな声で言わない[個人情報保護する]、穿刺部位は患者の希望を確認する[患者の意向を尊重する]であった。演習 b では緊急時でも患者主体を忘れない[人として尊重する]や処置の一つ一つに説明を行う[説明し同意を得る]であった。実践能力を統合する時期であるからこそ、学生は自己の患者体験や援助をリフレクションするなかで「倫理的実践」を学んでいた。(本研究は文部科学省平成 21 年度助成事業[看護職キャリアシステム構築プラン]の一部である)